



光を見る クレーター

アリゾナの高原にある休火山では、大胆な芸術実験が行われている。ジェームズ・タレルが40年間にわたって築き上げてきた「肉眼の天文台」では、観察者は光の存在を実感し、自分が何をどのように見ているのか考えずにいられない。

文 マナット・トロットマン



【前見開きページ】
南西方向から見た砂漠の
ローデン・クレーター。
【当ページ】
クレーターの奥底に位置する
「太陽と月の部屋」。

毎年、夏至の日に太陽が昇る時、
その光は「東のポータル」の
「スカイスペース」(下)に
差し込み、大きな大理石に
荘厳なイメージが投影される。
【左ページ】

中心スペースとなる深奥なる
「クレーターの目」。ベンチに
横たわって見上げると、
別世界のような光景が
待ち受ける。輝けるその光景は、
実は天空そのものなのだ。



アリゾナ州フラッグスタフの北側にある荒涼とした高原には、600万年以上にわたる地殻変動によって形成された数百の休火山がある。未舗装の道を車で進み、巨大な丘を迂回しながら、草を食む牛の群れや点在する農家の横を通り過ぎる。だが事前に調べていない限り、ローデン・クレーターには気づかないだろう。この周辺にある噴石丘のなかで、特に大きいわけでも、珍しい形状をしているわけでもない。しかしここは現代美術家のジェームズ・タレルが40年も没頭しているプロジェクトの現場であると同時に、その題材や媒体であり、完成の暁には、きわめて野心的かつ複雑なモダンアートになるはずだ。タレルは天体の動きに合わせて、火口を造形し、数々の地下室、トンネル、開口部をつくり上げている。ローデン・クレーターを「肉眼の天文台」に変容させ、大地や天空を、私たちの知覚そのものと一体化できる空間をつくり出そうとしているのだ。カリフォルニア南部で生まれ育ったタレルは、1960年代後半から芸術活動をしている。当時は、アメリカ

中のアーティストが美術の固定観念や表現技法に異議を唱え、タレルをはじめとするアーティストたちは、美術館や博物館のような純粹培養の世界から離れ、社会的、心理的、物理的に直接訴えかけることができる場所を探していた。そしてタレルは、ただ光のみを題材とした驚くほどシンプルな作品に取り組みことになる。光は普遍的かつ根源的なものでありながら、触れることも閉じ込めることも、ましてや売ることが買いうこともできない。パワフルな光という存在をしっかりと感じさせる環境をつくることは難しい。タレルは言う。「素材を最大限に生かすために光を集め、あたかも蓄えることができるような空間をつくるのです。人々が自然と導かれ、宇宙を認識できる場所をつくるのが私の願いです。それは、鑑賞者にとって経験の場となるのです」。

彼の初期のインスタレーションでは、なかに入るといきなり宙に浮かぶ光の立方体が目に飛び込んでくるものがあるが、これは壁の平面パネルに投射された光に過ぎない。タレルはこれを目の錯覚とは考えず、逆に「見えるものは、本質をほのめかしているに過ぎない」と解釈する。彼の作品は数千年の文化が培ってきたものを覆し、光が照らすのではなく、光そのものを見ることを私たちに要求する。タレルはこのような方法で、人間の知覚認識は理性的でも客観的でもなく、外部世界と連動して作用していることを明らかにする。インスタレーションを体験した人たちは、時間の経過と共に従来のものの見方を取り払い、実際の身体感覚の作用に目覚め始める。タレルによれば、これは「見ている自分を見ている」状態なのだという。タレルは、ローデン・クレーターに、感覚を内省できるインスタレーションを20カ所に設置する計画を立てている。いずれも、頭上に広がる宇宙と深くつながる経験をもたらすことが狙いだ。現在までに6カ所が完成



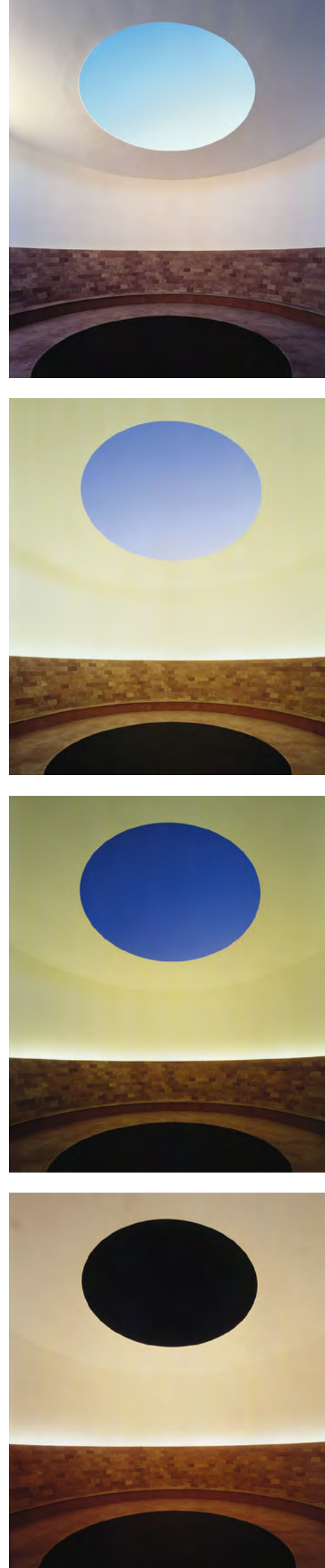
し、それぞれ異なる位置から太陽、月、星の光を取り込もうとしている。天井が開いた部屋から空を眺める「スカイスペース」シリーズは、タレルのプロジェクトとして世界各地で話題を呼んでいるが、「クレーターの目」と呼ばれる中心の部屋は、その究極的な作品といえるだろう。ここには巨大な円形の部屋があり、壁際に長椅子が置かれ、そこに座って空を見上げながらリラックスしていると、すぐに魔法のような光景が現れる。開口部には何も存在しないことを意識下で知っているにもかかわらず、それは豊かな青空のフィルムで閉じられているように見える。太陽が沈むと、この奥行きのないフィルムは暗くなつてゆくが、その変化は緩やかで、底なしのピロイドの黒に変わるまで夜になったことに気づかない。この経験も目の錯覚ではない。タレルは建築構造によって、新たなリアリティを観察できる条件を創出しているに過ぎない。彼は次のように説明する。「私たちはいつも、実際は大気の大底で暮らしているにもかかわらず、空は遠い場所

に広がるものと思いがちです。インスタレーションによって、その事実が実感できるのです。あなたはそのなかについて、その原点に立っている。天空はまさに目の前から始まっているのです」。

タレルを天空の虜にしたものは、長年のパイロット経験だった。航空エンジニアの父親のもとに生まれた彼は、10代の頃から小型機で飛び回っていた。そこで、タレルは天空で方向感覚を完全に失う瞬間や、究極の美が眼前に広がる体験をすることになる。彼いわく、ある高度に達すると大地の地平線は奇妙なカーブを描き、太陽が雲のじゅうたんを照らし、天空と飛行機がひとつの色に融合されるのだという。「飛行機は自分のアトリエ」と語るタレルは、1974年にサンタモニカの拠点を失い、新しい仕事場を探していた時も飛行機を駆使することになる。アトリエでの活動と飛行中に発見した現象を直接結びつけることができるという理由から、砂漠に向かうことを決意した彼はグッゲンハイム美術館の援助を得て、自家用機の「ヘリオ・

クローエ」に乗って飛び立った。

7ヵ月にわたって空からの探索を続けたタレルは、カナダからメキシコに伸びるロッキー山脈の西側に、ローデン・クレーターを発見する。この噴火口の跡は、最寄りの町から80キロ離れたベインテッド砂漠の片隅にある。高さは180メートルを超え、中心にはすり鉢状の大きな窪みがあり、周辺からの光は遮断され、願ってもない深みから空を仰ぐことができる。タレルは3年間の交渉を経てこの土地を購入し、1979年から作業を開始した。最初の仕事は、およそ100万立方メートルの土を運び入れ、クレーターの窪みを取り囲む縁の高さを整え、完全な円形にすることだった。タレルが手がけるプロジェクトならではのスケールと正確さが発揮され、空がドーム状に見える「蒼穹」現象がさらに引き立てられた。窪みの底の中心に寝そべって上方を眺めると、空間はクレーターに覆いかぶさるドームのように感じられる。空が無限の広がりではなく、身近な事象に変わってしまうのだ。



【前見開きページ】
 (左) シュールな趣がある「アルファ・トンネル」は、260メートルの傾斜通路で、「東のポータル」から「太陽と月の部屋」に通じている。
 (右) 建設中の「東のポータル」。
 【当ページ】
 (上から) 日中、日没を経て夜間へと移り変わる「クレーターの目」。
 【左ページ】
 芸術家、ジェームズ・タレル。

この「クレーターの目」から少し離れた窪みの周辺部に、「東のポータル」と呼ばれるふたつめの「スカイスペース」がある。ここに向かうには「アルファ・トンネル」と呼ばれる260メートルの傾斜通路を上ることになる。日中はこの通路の前方に、円形の空が見えている。しかし、このポータルに到達する直前で、一歩ごとに傾斜の角度が変わり、長い楕円形の「スカイスペース」が姿を現す。この部屋には開口部に向けて階段があり、クレーターの窪みに出ることができる。月の出ていない夜、照明のついた部屋から抜け出すと、暗闇に何百万という星が現れる。このような部屋で彼は「光を保護する空間をつくり、人が知覚できるように光を囲い込み、捕捉している」のだという。ローデン・クレーターはタレルにとって、キヴァ（地下聖堂）の伝統に則った儀式的場所であり、また近隣のホビ文化の儀式的の部屋や、アイルランドのニューグレンジ巨大古墳を貫く石器時代の通路、またはエジプトのピラミッドのような存在なのである。このような畏怖すべき遺跡は、内

部に深奥なる空間を擁し、天空のサイクルを巧みに取り込みながら、個々人が宇宙を経験できるように設計されているものが多い。ローデン・クレーターも同じように、毎年、夏至の日には太陽が昇る時、その光が「東のポータル」から入り込み、「アルファ・トンネル」を通じて「太陽と月の部屋」にある巨大な大理石にイメージを投影するようになっていく。今後のプロジェクトでは、もうひとつのトンネルから月のイメージがこの大理石の裏側を照らすことになるという。また、別の部屋では、北極星の光をとらえる細い通路をつくり、地軸で回転している地球を感じられるようにするのだという。

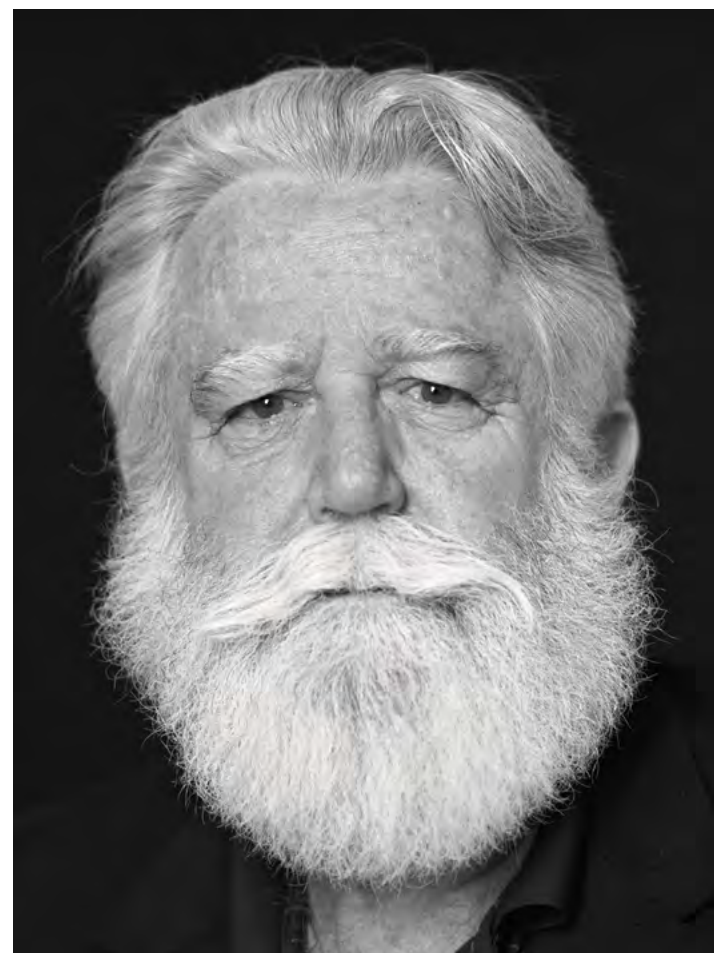
ローデン・クレーターのインスタレーションは大がかりで複雑だが、このメカニズムは外部からほとんど確認することができない。クレーターの縁取りの造成も、噴石丘の全体の大きさから考えれば、ほんのわずかな修正に過ぎない。タレルはほとんどのインスタレーションを地下に置くことによって、現代の驚異的なエンジニアリングの成果よりも、古から続く噴石丘の姿

や時の流れを強調している。タレルに言わせれば、これは「地質年代的な舞台装置」なのだ。「天空の光の事象をとらえ、光が『球体の音楽』を奏でる空間をつくりたいのです。この空間は地球の回転や、天体の運行によって奏でられ、私がこの世を去った後も未永く演奏が続けられることでしょう」。

これほどの野心からすれば、71歳を迎えたタレルのプロジェクトが、まだ3分の1も完成していないとしても、驚くには当たらない。このプロジェクトの一般公開はこれまで何度も延期されており、タレル自身による冗談交じりの諷刺文句「いずれそのうち、ローデン・クレーター」という言葉通りに、神話のような存在となりつつある。タレルは現在も資金集めを続けており、建設の次の段階が完了すれば、1泊ツアーを施行する予定だという。それまでローデン・クレーターは、招待客のみに公開されている。

＊
 「パテックフィリップマガジン・エクストラ」(patek.com/owners)について、この記事の特別関連コンテンツをご覧いただけます。

「光を集め、あたかも蓄えることができるような空間をつくるのが願いです。人々が自然と導かれ、宇宙を認識できる場所をつくりたい。それは鑑賞者にとって、経験の場となるのです」



PHOTOGRAPHS: FLORMAN HOLZHERY/COPYRIGHT JAMES TURRELL